

中学生における共同体感覚の変化と不登校について

池田 裕亮

(愛媛大学大学院教育学研究科)

1 研究目的

本研究は、アドラーの「共同体感覚」と中学生の欠席傾向にどのような関係がみられるかを明らかにすることを目的とする。欠席日数や遅刻回数等、欠席傾向と共同体感覚尺度得点の相関を調査し、「共同体感覚」をもつことが不登校の予防に寄与するのかを検討する。また、複数回の調査を実施して、中学生の共同体感覚が学校生活を経てどのように変化していくのかを明らかにする。

2 研究方法

- ・対象者：A県B市立中学校全生徒478名
- ・手続き：全生徒に配布されているタブレット端末を利用して質問紙調査（Web上での回答）を行う。欠席傾向との関連を検討するために、「共同体感覚尺度」に加えて「小中学生版不登校傾向尺度」「学校適応感尺度」を実施する。
- ・2022年7月、2023年3月、8月に実施。
- ・調査学校長の許可および愛媛大学教育学部倫理審査委員会の承認（承認番号：R4-23）を得ている。

3 研究結果

共同体感覚尺度の3因子「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」を説明変数、令和4年度の年間欠席日数を目的変数として、第1回～第3回調査についてそれぞれ得られた全データを投入して、重回帰分析を行ったところ、第2回調査では、「所属感・信頼感」が欠席日数を有意に予測していた ($R^2=.018$, $\beta=-.151$, $p<.01$)。遅刻回数を目的変数としたところ、第2回調査において、第3因子「貢献感」が遅刻回数を有意に予測していた ($R^2=.035$, $\beta=-.179$, $p<.01$)。

共同体感覚尺度の3因子を従属変数、学年及び性別、調査時期を独立変数とする3要因混合計画の分散分析を行った。第1回、第2回(R4)の調査では、従属変数を「自己受容」としたときのみ、学年と性別の主効果および学年と調査時期の交互作用が有意となった(学年： $F(2, 388)=4.31$, $p=.014$ ；性別： $F(1, 388)=6.57$, $p=.011$)。多重比較(HoIm法)の結果、1年が3年より有意に高かった ($t(388)=2.86$, $padj=.014$)。また男子より女子が有意に低かった ($t(388)=-2.56$, $padj$

$=.011$)。第3回(R5)の調査では従属変数が「自己受容」のとき、学年の主効果が有意となった(学年： $F(2, 386)=4.92$, $p=.008$)。多重比較(HoIm法)の結果、2年が3年および1年より有意に高かった(3年： $t(386)=2.69$, $padj=.015$ ；1年： $t(386)=2.95$, $padj=.010$)。また従属変数が「貢献感」のとき、学年の主効果および学年と性別の交互作用が有意となった(学年： $F(2, 386)=2.98$, $p=.052$)。多重比較(HoIm法)の結果、2年が3年より有意に高かった ($t(386)=2.44$, $padj=.045$)。

現在の第2・3学年について、縦断的に変化を捉えるために、全3回とも回答した生徒のデータを用いて同様に分散分析を行った。第2学年では従属変数が「所属感・信頼感」のとき、調査時期の主効果および性別と調査時期の交互作用が有意となった ($F(2, 162)=4.77$, $p=.012$)。多重比較(HoIm法)の結果、第3回(R5)が第2回(R4)より有意に高かった ($t(81)=3.81$, $padj=.001$)。交互作用の下位検定を行ったところ、男子の第3回(R5)が第1回・第2回(R4)より有意に高かった(第1回： $t(81)=3.04$, $padj=.006$ ；第2回： $t(81)=3.38$, $padj=.003$)。従属変数が「自己受容」および「貢献感」のとき、性別と調査時期の交互作用が有意となり、下位検定を行った。「自己受容」は第2回(R4)において、男子より女子が有意に低かった ($t(243)=-2.07$, $padj=.040$)。「貢献感」は女子の第2回が第1回より有意に低かった ($t(81)=-2.51$, $padj=.042$)。

4 考察

共同体感覚の一部は欠席日数を有意に予測していたものの、説明率は低い。横断研究として、R4年度の分散分析の結果、学年が1年から3年に上がると「自己受容」得点が低くなり、男女間でも有意な差がみられた。また縦断研究として全3回の分散分析の結果、各学年の得点分布に特徴があることが示された。今後は各学年の生徒や教員の特性、および欠席日数の多い生徒への具体的な介入方法について、聞き取りを行った上で考察する。